

第6学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「似た意味の言葉の使い分け」

2 単元の目標

語感と前後の文に応じた類義語の使い分けを捉え、言葉を使う場面で役立てる。類義語を選んだ理由付きの推敲文に自分の判断と理由を表す。友達の応答や自分の記録を基に、言葉の捉え方や表し方を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①語感と前後の文に応じた類義語の使い分けを理解し、学習で扱った語句や例を示して説明している。 (〔知識及び技能〕(1)オ)	①「書くこと」において、教師作成の報告や意見の文で似た語を入れ替え、強さ・立場・文体に合う語を選んで見直している。(B(1)オ)	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

この単元では、語感と前後の文に応じた類義語の使い分けを中心に学ぶ。教師作成の報告や意見の文で似た語を入れ替え、強さ・立場・文体に合う語を選んで直す活動を組むことで、言葉について知ることと、目的に合わせて使うことを結び付ける。指導要領の〔知識及び技能〕(1)オとB(1)オに関係する学習である。成果は、作業が終わったかのほかに、類義語を選んだ理由付きの推敲文にどんな判断の理由が残るかで捉える。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

予想される難しさは、辞書で同じ説明ならどんな文章でも交換できるとすることである。相手と文章の目的を明記し、選ぶ語で主張が強まりすぎないか読み比べる。初めの答えを消さずに残し、学習後に何を変えたか、なぜ残したかを比較できるようにする。児童の反応は予想で、実在の学級の姿を示すものではない。読む速さや記述量の差を、そのまま国語の力の差として扱わない。

5 指導と評価の計画（全1時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本 時）	○教師作成の報告や意見の文で似た語を入れ替え、強さ・立場・文体に合う語を選んで直す。 ○考えた理由を交流し、類義語を選んだ理由付きの推敲文を仕上げる。	知①・思①（学習記録）／態① は関連する学習の記録も合わせて見る。



6 本時の指導 (1/1)

(1) 本時の目標

語感と前後の文に応じた類義語の使い分けについて、例や資料を根拠にした自分の考えを類義語を選んだ理由付きの推敲文へ表すことができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。 ○「意味は似ていても、読み手が受ける印象は同じですか」 【めあて】語感と前後の文に応じた類義語の使い分けについて、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・同じ評価でも、強く言い切る語と控えめな語では印象が異なる。 ・初めの見方では決められない箇所もあり、例を比べてみたい。	本時に使う具体例が見える所へ置く。辞書で同じ説明ならどんな文章でも交換できるとする姿が見られても、すぐに訂正させず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 (分)	2 教師作成の報告や意見の文で似た語を入れ替え、強さ・立場・文体に合う語を選んで直す。 3 類義語を選んだ理由付きの推敲文の下書きや途中の記録を示し、考えた理由を説明する。 ○「意味は似ていても、読み手が受ける印象は同じですか」 4 聞き手は、説明に使われた語句や資料を示して質問する。答えが異なる所は、意味や条件を調べてもう一度表す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じ評価でも、強く言い切る語と控えめな語では印象が異なる。 ・最初はそう考えたが、別の例と比べると直したいところが見つかった。	相手と文章の目的を明記し、選ぶ語で主張が強まりすぎないか読み比べる。説明が難しい児童には、対象の語句を選ぶ、線や矢印で関係を示す、口で説明するという方法も用意する。書く量を減らす場合も、本時に考える言葉の関係は残す。 早くできた児童には、同じ説明が通らない場合や、他の言い方の可能性を考えさせる。 ◎思① 教師作成の報告や意見の文で似た語を入れ替え、強さ・立場・文体に合う語を選んで見直している。(途中の記録・説明)
まとめ (分)	5 類義語を選んだ理由付きの推敲文へ、本時の判断と理由、見直した箇所を記す。 【まとめ】同じ評価でも、強く言い切る語と控えめな語では印象が異なる。 6 初めの答えとの違い、または理由を確認して残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・語感と前後の文に応じた類義語の使い分けを、別の場面でも意識して使いたい。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。意味は似ていても、読み手が受ける印象は同じですかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知① (語句や関係の説明) ・態① (見直しの理由。単元を通した記録と合わせる)

(3) 本時の評価

おおむね満足できる状況は、類義語を選んだ理由付きの推敲文で、本時に選んだ語句や説明の理由を表している姿とする。辞書で同じ説明ならどんな文章でも交換できるとする場合は、相手と文章の目的を明記し、選ぶ語で主張が強まりすぎないか読み比べる。発表の回数や作品の飾り方は評価の根拠にしない。

(4) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には語感と前後の文に応じた類義語の使い分けを確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に類義語を選んだ理由付きの推敲文で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に確かめたこととその後に使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

